

# 院内学級教員の児童生徒との死別による悲嘆とその対応

○寺本あかり  
(静岡大学教育学部特別支援教育専攻)

石川慶和  
(静岡大学教育学部)

KEY WORDS: 院内学級 悲嘆 SCAT

## I 目的

院内学級教員が児童生徒との死別で抱く悲嘆とその対処の特徴を明らかにし、院内学級教員の精神的健康の維持に必要な対応の在り方を検討する。本研究における「院内学級」は、病院内に設置された小・中学校の特別支援学級に加え、特別支援学校の分教室及び訪問教育も含める。

## II 調査

### 1. 方法及び内容

- 1) 対象：病院内での教育に3年以上携わり、教員として児童生徒との死別を経験した4名を対象とした。
- 2) 手続き：60～80分程度の半構造化個別面接調査を平成28年10～11月に実施した。回答は許可を得てICレコーダーで記録した。
- 3) 調査内容(1)フェイスシート：①性別、②年齢、③同居者の有無、④教員勤務年数、⑤職歴を尋ねた。(2)個別面接：死別前・死別直後・それ以降の気持ちや周囲の人との関係、自己の職務への評価等を尋ねた。
- 4) 倫理的配慮：本研究は静岡大学ヒトを対象とする研究倫理委員会の承認を得て実施した(登録番号:16-25)。

2. 分析：大谷(2008)が提案する Steps for Coding and Theorization(以下、SCAT)を用いて分析した。調査対象者の語り内に内包する思考や意図を調査者が主体的に炙り出す分析過程を経る質的分析手法である。

### 3. 結果

(1)フェイスシート:4名とも通常の学級での勤務経験を有しており、教員勤務年数は23.5年以上で内、院内学級での勤務年数は7年以上であった。

(2)個別面接:SCATにより院内学級教員の認知や行動に関する理論を計147個生成し全理論を1)～19)の計19個にグループ化しラベル付けした。1)～19)の太字はラベル名を示し、一部グループの理論の概要を文章化しTable1に記した。

## III 考察

### 1. 生と死の認知的不協和と悲嘆内容の関係

院内学級教員が予期悲嘆を抱き難いこと(b)と死別後の悲嘆(c)の現状には学ぶことは生きることと捉えるスタンス(k)に起因する生と死の認知的不協和(f)が影響していると考えられる。

### 2. 院内学級教員としての役割の不確定さ

院内学級教員が抱く役割の不確定さやもどかしさ(g)も職務への納得や満足感を得難くし、死別による悲嘆を複雑化させるであろう。しかし、自己の役割意識を他教員との関係性の中で位置付ける教員にとって(島田,2013)、単独配属等により、他教員との役割の照らし合わせが困難な環境に身を置いている院内学級教員(h)は特に役割や専門性を規定し難い状況にあると言える。また山本(2004)が院内学級教員の専門性として挙げた共感的関わりは、役割の不確定さ(g)をもたらし素地として働いていると考えられる。役割の納得と自信を伴った自己規定が困難な性質をもつ職場環境と専門性を併せもつため、院内学級教員の役割の不確定さの改善は容易ではない。

### 3. バディ効果を感じられる関係の重要性

同居者の有無に関わらずバディ効果を希求しつつ家族や組織外への吐露が少なかった(d)のは、自己の感情の非表出傾向(e)に加え児童生徒との死別を頻回に経験するという特異的な状況で自己が抱く心理を同組織以外の人には理解して貰い難いと感じていることに起因すると考える。

### 4. 死別の捉え方と職務の継続の関係

死別を伴いつつ職務を継続する精神的要因に、辛い児童生徒との死別(a)を、職務意欲を増強させる思考(i)により改めて肯定的に位置付ける対処(j)があると考えられる。この対処は、死別後の悲嘆(c)を改善し職務満足感を高め、頻回する悲嘆からの回復を円滑に進行させる素地として有効に作用していると言える。

## IV 今後の課題

院内学級教員が自己の役割意識の明確化をどのようなプロセスで進めるのかを明らかにすることを今後の課題とした。

Table 1 SCATにより生成された理論の概要

1) 文脈想起記憶の起因因子と特徴	院内学級配属当初の児童生徒との初めての死別とその際の悲嘆を特に印象的に記憶していた(a)。
2) 予期悲嘆	将来的な児童生徒の死を想定するが、自己の直接的な死別経験を想定しないため予期悲嘆は抱かず、死別後に職務上の失敗や不十分さを認識し後悔していた(b)。
3) 死別後の悲嘆	自己の積極的な行動と思慮の不足を後悔する傾向が見受けられた(c)。
4) 悲嘆への対処	バディ効果を希求するが、家族や組織外への吐露は少なかった(d)。一方で、自己の感情の非表出傾向があった(e)。
5) 悲嘆への対応	平素から教員間でバディ効果や共通意識、非孤独感の醸造を意識し非形式的に行動していた。また、子どもと死別した家族に対して意識的に肯定的な関心を示す対応をしていた。
6) 教員同士の関係	院内学級教員同士は児童生徒に関する共通意識により肯定的な対人魅力を深めるが、本校管理職等の院内学級訪問は院内学級教員に心理的な負担を与える可能性があった。
7) 児童生徒の家族との関係	児童生徒やその家族等と教員という職務意識を超過した1人の人間としての意識で関係を築き、共感的関わりを実施していた。また、児童生徒の家族ともバディ効果を抱いていた。
8) 医療と教育の関係	
9) 院内学級教員の特異性	
10) 生と死の認知的不協和	児童生徒から医療的な死の実感と教育的な生の実感を抱き認知的不協和に陥っていた(f)。
11) 役割	児童生徒の病状等による個別性や保護者の教育に対する意向、各病院の院内学級の位置付けにより院内学級教員に求められる役割が異なりと共に不確定であり、自己の役割意識と組織が要請する役割に齟齬が生じた場合はもどかしさを抱いていた(g)。しかし、職務を継続していく中で自己の役割を規定し、他者に語る事が可能になっていた。
12) 院内学級教員1人当たりの責任集中	
13) 職務専門性の向上意欲	単独配属等により、他教員との役割の照らし合わせが困難な環境に身を置いていた(h)。
14) 職務意欲の増強	児童生徒の念望との同一化的動機付けによる充足感や達成感と院内学級の意義を認容し自己決定を伴いながら職務に従事することで自己効力感を抱いていた。また、無力感も昇華させ、悲嘆を経験しながらも日々の職務意欲を増強させている思考が見受けられた(i)。
15) 院内学級の児童生徒の特徴	
16) 児童生徒からの影響	児童生徒との死別も、自己が今後の進むべき方向性や役割を見出す機会になると捉えていた(j)。
17) スタンス	学ぶことは生きることと捉え、教育の保障により児童生徒に生の実感を与える意欲に満ちていた(k)。
18) キャリアによる使命感	
19) 病弱教育の認知における課題	

(TERAMOTO Akari, ISHIKAWA Yoshikazu)